11　次の文章は、『曽我物語』を題材とした『』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。　　　　　　　　〈広島大〉二〇二一年度出題

　古めかしきに、修行者ありて国々る。の山辺のとも、夢としもなく世を渡るに、ある時、その名も高き富士の麓る。Ａ行方も知らぬと眺めしの心にりて見れば、そもまた誰が焚く煙ぞや。降るか残るか溶けぬか無きか、いさ白雪の雲に高く、も半腹に①なり、鳥もでか中央よりらん。の山重ぬべき。我がののみかは、三国にふべきもあらず。としてまた時知らず、目れずもを眺めて、まだ秋としもなきに、Ｂ時もにかい暮れ、我が衣手の墨染めの頃なり。

　元よりもへの身②なれば、、など尋ぬるに、彼方を見れば、火影ほのめいて、の軒しき有り。立ち寄りて見れば、卑しからずしつらひ、に引き散らし、常ならぬきの香、をかしくしうして、いと優なる女房の、めでたきばかりなるが、近く寄り居、松が枝、松傘うちくべて、き火に添うたる様、またアには目馴れずぞ有りける。やがて立ち寄り、仮寝の事をわぶるに、女房聞いて、「いたはしや、旅行の袖の、なに行き暮れ給ふとや。人目れたるＣきの、（　　　）のの憂きも、一夜は明かし給へかし」と許す。

　うちうれしくて内へ入るに、彼の女房の焼く釜を見れば、湧き返りて湯玉立つを、いささめに汲みて浴びけり。Ｄおよそ人のわざとは見えず。かくてふに、外よりふたる者の帰り入りぬ。其の身に③なりて、傷多くりたり。女房、「帰り給ふ」とふに、苦しげ④なるへせしは、のさかと見えたり。物の具取りければ、イ痛手と見えしもつい癒えけり、いとど不思議にぞ侍る。

　僧を見て、「誰ぞ」と云へば、妻、「旅の人にて、宿を召したり」と云ふ。夫聞いて、「さては行き暮れ給ふか。かかる見苦しき所に御宿召し候ふ事よ。恥づかしくこそ侍れ」と云ふ。僧、「旅寝を許し給ふ事うれしくこそ候へ。さるにても御身は如何なる人にてまします」と云へば、「我はの十郎、あの者はの虎と云ふ女なり。今は昔に過ぎし世を、語るにつけてあさましけれど、去りにし建久の、この辺りにして、夜昼を狙ひ、終にを討ち、のを遂げつつ、ウ身は其の時に空しくなれど、はまだ消えもせで、Ｅ其の罪、に感じ、執心今更残る世の、御僧にまでみえ参らせ候ふぞや。草の枕のうたた寝も、エ縁あればこそ見もし見えもすれ。然るべくは弔ひ給はれ。さりながら、うれしくも、やがて修羅のを出でて、来年の秋は、小田原の城主にまれ候ふ。客僧、縁有らば、それにて御目にかかるべし。是を持ちて出で給へ」と、のき、片方外して、僧に与ふ。僧、目貫きを受け取りしに、この人もなくなり、日もまだ暮れず。不思議に思ひ、夢かと思へど、目貫きは更に有りけり。

　さて、立ちき、とかく送る内、はや明くる年の秋になる。何となう小田原に行く。巷の沙汰に、「殿には若君出で来給へども、左の手握り給ひて開かず、父母き給ふ」と云ふ。

　僧、さては約束の人⑤なりと知り、奥へ人して、「御手、開くるやうに致し申さん」と云ふ。やがて「召せ」とて、僧参り、片方の目貫き取り出だし、若君に見せければ、其の時、左の手を開き給ふに、目貫き有りて、僧の持て来たりしと一対なり。人々不審しけるに、Ｆ富士の裾野の約束を語りしとなり。

注　宇津の山……静岡市駿河区宇津ノ谷と藤枝市岡部町岡部とにまたがる山。

曽我の十郎祐成……『曽我物語』には、所領争いがもとで父親を工藤祐経に暗殺された後、相模国曽我荘（現在の小田原市近郊）を所領とする曽我祐信に弟の曽我五郎と共に養われながら、苦難の生活のなかで祐経への憎悪を募らせ、建久四（一一九三）年の富士の裾野の巻狩りにおいて祐経を殺害し、仇討ちを遂げたことが描かれている。

大磯の虎……『曽我物語』には曽我十郎の愛人として描かれている。

修羅……仏教の転生にいうの一つで、争いや怒りが絶えない阿修羅の世界。

太刀の目貫き……太刀の装飾金具。

問１　二重傍線部①～⑤について、それぞれ文法的に説明せよ。

　　例　推定の助動詞「なり」の連用形

問２　波線部ア「鄙には目馴れずぞ有りける」、イ「痛手と見えしもつい癒えけり」、ウ「身は其の時に空しくなれど」、エ「縁あればこそ見もし見えもすれ」を現代語訳せよ。

問３　傍線部Ａ「行方も知らぬと眺めし聖」は、鎌倉時代初期に成立した和歌集Ｘに収められた和歌Ｙ「風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我が思ひかな」をふまえている。このことについて、次の問いに答えよ。

１　和歌集Ｘには、和歌Ｙを詠んだ人物の和歌が最も多く収められている。和歌集Ｘの名前を答えよ。

２　和歌Ｙを詠んだ人物は、鳥羽上皇に北面の武士として仕えた後に出家し、諸国を遍歴しながら仏教的思想を背景とする和歌を詠んだ。この人物の名前を答えよ。

問４　傍線部Ｂに「時も酉にかい暮れ、我が衣手の墨染めの頃なり」とあるが、実際にはいつ頃のことか。そのことが分かる表現を本文中から七字以内（句読点は除く）で抜き出せ。

問５　傍線部Ｃの（　　　）に当てはまることばを次から選んで答えよ。

　　ａ　草　　ｂ　仮　　ｃ　山　　ｄ　　　ｅ　旅

問６　傍線部Ｄ「およそ人のわざとは見えず」について、次の問いに答えよ。

１　現代語訳せよ。

２　なぜそのように言えるのか。本文の内容をふまえて三十字以内で説明せよ。

問７　傍線部Ｅ「其の罪、修羅に感じ」は、罪業が原因で輪廻から脱することができず修羅道に留まった、という意味である。これについて、次の問いに答えよ。

１　「修羅」の様子がわかる描写を本文中から二十字以内で抜き出せ。

２　この人物は、なぜ自身の行動が罪業だと言うのか。本文および『曽我物語』の内容をふまえ、行動の内容を明らかにしつつ説明せよ。

◎問８　傍線部Ｆ「富士の裾野の約束」とは何か。本文の内容をふまえて五十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝ラ行四段活用動詞「なる」の連用形

　　　②＝断定の助動詞「なり」の已然形

　　　③＝ラ行四段活用動詞「なる」の連用形

　　　④＝ナリ活用形容動詞「苦しげなり」の連体形の活用語尾

　　　⑤＝断定の助動詞「なり」の終止形

問２　ア＝Ａ田舎では Ｂ見慣れない様子であった

Ａ＝４／Ｂ＝６

　　　イ＝Ａ深い傷と見えたものも Ｂすぐに Ｃ治った

Ａ＝５／Ｂ＝２／Ｃ＝３

　　　ウ＝Ａ体は Ｂ祐経を討った時に Ｃ死んだけれど

「死ぬ」に当たる表現がなければ全体０。

Ａ＝２〔「我が身」も可。〕

Ｂ＝４〔「仇討ちの時」「仇討ちを遂げた時」も可。〕

Ｃ＝４

　　　エ＝Ａ因縁があるからこそ、Ｂ私はあなたに会い、Ｃあなたに見られもする

「見る」「見ゆ」の動作に関わる人物を補っていなければ全体０。

Ａ＝４／Ｂ＝３

Ｃ＝３〔可能（見ることができる）の訳も可。〕

問３　１＝新古今和歌集

　　　２＝西行

問４　日もまだ暮れず（7字）

問５　ｃ

問６　１＝Ａまったく Ｂ人間の行いとは Ｃ思われない

「まったく～ない」という呼応の表現が書けていなければ全体０。

Ａ＝３／Ｂ＝４／Ｃ＝３

　　　２＝Ａ女房が、Ｂ煮え立つ湯を汲んで体にかけても Ｃ平然としていたから。

（29字）

Ａ＝２／Ｂ＝４／Ｃ＝４

問７　１＝其の身朱になりて、傷多く蒙りたり。（17字）

　　　２＝Ａ祐経への執着心と憎悪をつのらせ、Ｂ最後には祐経を殺害し仇討ちを成し遂げたという祐成の行動は、Ｃ仏の教えに反するから。

Ａ＝３〔「祐経への憎悪、憤怒」と「執着」が書けていればよい。〕

Ｂ＝３〔「祐経を殺害」という行動が書けていればよい。〕

Ｃ＝４

問８　Ａ僧の供養によって、Ｂ小田原城主の子として生まれ変わった祐成と、  
Ｃ目貫を頼りに Ｄ再会しようという約束。（47字）

「僧と祐成の再会の約束」であることが示されていない場合は全体

０。

Ａ＝２／Ｂ＝３／Ｃ＝２／Ｄ＝３

【現代語訳】

　昔の話に、修行者がいて国々を回る（という話があった）。宇津の山辺の（うつつではないが、）現実とも、夢ともなく世を渡っているが、ある時、その名も高い富士の山の麓を通りかかる。「行方も知らぬ」と詠じた（古の）聖の心に則してみると、一体誰の焚く煙だろうか。（雪に目をやると、今）降っているものか残っているものか（そしてその雪は）融けないものか（、融けて）ない（時もある）のか、さあ（、わからないが、）白雪が雲より高く（積もり）、雷も（山の）中腹で鳴り、鳥もどうして（山の）中央から飛んで（頂を越えて）行くだろうか。（いや、高すぎて越えられまい。）比叡の山を二十重ねたほど（の高さ）に違いない。わが秋津洲のほまれであるだけだろうか、（いや、秋津洲〔＝日本〕だけではなく、）三国（＝日本・中国・インド）に比べるものもない。高くそびえてまた季節にかかわらず、（雪があり、そのような富士山を修行僧は）見飽きもせず山を眺めて、まだ秋というわけでもないのに、（また眺めるのに飽きたわけでもないのに、）時刻も酉の刻（＝午後六時頃）に暮れ、自身の衣手の墨染めの（ように暗い）頃である。

　言うまでもなくさすらいの身なので、木陰や、苔の筵などを探す時に、向こうを見ると、火の光がほのかに見えて、簡素な家で軒の有り様も淋しい家がある。立ち寄って見ると、粗末ではなく仕立て、机に草子をひき散らかし、尋常ではない空薫の香が、趣深く麗しくて、たいへん優雅な女房で、衣装もただもう美しいばかりの様子の人が、かまど近くに寄って座り、松の枝や、松かさをくべて、焚火に寄り添っている様は、また問２ア田舎では見慣れない様子であった。すぐに立ち寄って、旅の仮寝のことを嘆く（ようにして願う）と、女房は聞いて、「気の毒なことよ、旅行のお方が、なんとまあ行き暮れなさると（いうわけです）か。人に会うこともない足曳の、山の住居のつらい床ですが、一夜はお明かしなさいな」と許す。

　内心嬉しく中へ入って、その女房が焚く釜を見ると、沸きかえって湯玉が立っているが、（その女房は）少しばかり盥に汲んで浴びた。問６１まったく人間の行いとは思われない。こうして湯浴みを終えると、外から鎧を着た者が帰って（家に）入った。その身は（血で）朱に染まって、傷を多く受けている。女房が、「お帰りなさい」と言うと、苦しげな返事をしたその人は、戦の帰りかと見えた。武具を取ったところ、問２イ深い傷と見えたものもすぐに治った、ますます不思議なことです。

　（帰ってきた主人が）僧を見て、「誰か」と言うと、妻は、「旅の人で、宿を所望なさった」と言う。夫は聞いて、「さては行き暮れなさるか。こんな見苦しい所にお宿をご所望なさいますことよ。お恥ずかしいことです」と言う。僧は、「旅寝をお許しくださることが嬉しく存じます。それにしても御身はどのようなお方でいらっしゃるのか」と言うと、「私は曽我の十郎祐成、あの者は大磯の虎という女である。今はもう昔として過ぎ去った世を、語るにつけてもあきれたことだが、去る建久の頃、この辺りで、夜昼（父の）仇をつけ狙い、ついに祐経を討ち、長年の本望を遂げながら、問２ウ体はその（＝祐経を討った）時に死んだけれど、魂魄はまだ消えもしないで、その罪は、争いや怒りが絶えない阿修羅の世界に（相当すると）感じ、執心は今にまで残るこの世で、御僧にまでお目にかかりますことよ。旅寝のうたた寝でも、問２エ（前世からの）因縁があるからこそ、私はあなたに会い、あなたに見られもする。そういうご縁ですから（どうか我々を）弔ってください。しかしながら、嬉しいことに、そのまま修羅の巷を出て、来年の秋には、小田原の城主として生まれます。客僧よ、ご縁があるならば、そこでお目にかかろう。これを持ってお出でなさい」と、太刀の目貫を片方外して、僧に与える。僧が、目貫を受け取ったところ、この人もいなくなり、日もまだ暮れていない。不思議に思い、夢かと思うが、目貫は確かにあった。

　さて、そこを立ち退いて、あれこれと日を過ごすうちに、早くも明くる年の秋になる。向かうとはなしに小田原に行く。町の噂に、「殿には若君がお生まれなさるが、左の手を握りなさって開かず、父母は嘆きなさる」と言う。

　僧は、「さては約束の人だ」と知って、（城の）奥へ人をやり、「御手を、開くようにいたし申そう」と言う。すぐに「召し上げよ」ということで、僧は参り、片方の目貫を取り出し、若君に見せたところ、その時、左の手をお開きになるが、（そこには）目貫があって、僧が持ってきたものと一対である。人々は不審に思ったが、（僧は）富士の裾野での約束を語ったということである。